

# つどい

636号

2020/5/24

〒204  
0022  
清瀬市松山一ノ二一  
カトリック清瀬教会  
TEL 〇四二(四九一)〇一〇四

日本で、新型コロナウイルスが、簡単に死をもたらすことがわかったのは、香港往復豪華船の旅で起きた感染事件からでした。狭い空間に、乗組員を合わせると、何千人の人が密室・密閉状態で何日も暮らして、帰港地横浜に着いた時は、二割近くの方々に感染していたのです。

得体の知れない状態から、感染力の強いウイルスが、人の細胞に侵入し、呼吸器や、他の臓器の働きを止めてしまふ、つまり、死にいたらせることが具体的な事例で示され、国境を越えて、人類を恐怖のどん底に落としめたのです。志村けんさんの悲劇は、明日は我が身と思わせるに十分でした。熱が出て、風邪かなと思っていたのが三日間、病院

の集中治療室で三日間、その間、話すことも、顔を見せることもなく亡くなつて、遺体として棺に納められ、火葬場に直行、お骨になつて身内に渡されたとのことでした。身

## 香部屋 ミサ

### 西川 哲彌 神父

いいというわけには行かないことを、徹底的に指導されました。この指導は次第に浸透して行き、人が無防備に集ることが、生命の危険に関わることを実感させられました。教会も敏感に反応しました。公開ミサの中止です。大司教さまの決断は的確でした。そして、たくさんの、

のよだつような新型コロナウイルスの恐ろしさを知らされました。以来、私たちは、恐怖感を持つて、コロナに対処するようになつたのです。国や都が、事実を逐次公表し、厳重警戒期間を設定し、「三密」を避けることを義務付けたのです。入試、卒業、入学と重なりながら、自分だけ気をつければ

読み切れないほどの文書が各教会、教区で働く司祭たちに送られました。考えてみると、教会ほど「危ない」ところはなかつたのです。「集る」「話す」「歌う」「食べる」どれを取つても、危険の塊が教会だったのです。「ミサは大切です。ある面、教会の命です。しかし、もつ

と大切なのは人間の命です。命を危険にさらしてまでミサにこだわりません。」と明言し、当分の間、つまり、国や都が安全宣言を出すまでという条件付きで公開ミサは中止され、信徒の主日ミサ出席の義務は免除されました。大司教さまの苦渋の決断は、しっかりと信徒に受けとめられました。

公開ミサの恐ろしさは、参加者を断れないことにあります。最初から、入場制限をしていけば断ることはできますが、普通、ミサに与りたいという方がいらつしやつた時、

緒事情により「つどい」の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

また、今号につきましては、新型コロナウイルス感染症のため、通常のものとは異なり、信徒動向、行事等の記事がないことをご了承ください。

聖堂がいつばいで、入る余地がないということでもない限り、入場を断れないのがミサです。ですから、新型コロナウイルスの感染を避けるということを考えるなら、ミサそのものを中止するしか仕様がありません。お葬式も、どなたが来られるかわからない時は、葬儀ミサをしないで、身内だけの祈りの会にして、火葬を済まし、公開ミサが許されるようになって、皆さんに集まっていたいただき、追悼の意向でミサをしていただくしかないでしょう。

新型コロナウイルスの感染力の強さと、ウィルスがうつった後の大変さを考えると、どなたがどれだけいらつしやるかが、はつきりしないような葬儀でミサをすることは暴挙に等しいのです。

さて、公式ミサは中止になりました。しかし、大司教さまは、司祭がミサを捧げるこ

とは当たり前で、特に、主日のミサは、司祭の義務とまでおっしゃいました。私にとつて、その言葉は、司祭はミサを捧げなさい。ミサを通して、新型コロナウイルスと戦っている方々や、感染を恐れている方々を応援しなさいというふうに聞こえました。神学校で、少し古い教育を受けた者にとつて、ミサは、感染した方、治療に当たっている方々を応援するという意味で欠かせない祈りのかたちなのです。

公式ミサは中止ですが、非公式なミサは捧げてよしとすれば、どうすればいいのか、考えました。もともと、毎日ミサをしているので、それを続けられればいいのですが、いつものように、聖堂の祭壇でするわけには行きません。祭壇をそのまま使用となると、よほど工夫をしなければ公式ミサになってしまいます。かといって、信徒ホール二階

の司祭室の食卓を使うとなれば、道具一式を移動しなければなりません。いろいろ考えた末、場所は香部屋に落ち着きました。

清瀬の香部屋は、ドア一枚で聖堂と直結です。道具も揃っているし、準備も片付けも簡単、ここでしようと決めました。時間は、今までの週日ミサと同じ朝8時にしました。

そして、四旬節、灰の水曜日（二月二六日）の翌日から香部屋ミサが始まったのです。本来なら、聖堂に入るドアをしめるべきなのですが、わずかに十五センチ開けました。声が聖堂に漏れることを意識したからです。何も知らないで聖堂に入ると、ミサをしているのが聞こえて変な感じがしたかもしれません。おおよそ二ヶ月半、こんな感じでミサが続きました。

聖堂に来られる方は、一名から五名の間で、いつもは二

〜三名が多かったと思います。それは、聖体拝領で、私が聖堂に出て行くのでわかりました。日曜日（主日）は、多いときは十名、普通は五〜六名でした。私も、少し声を大きくしてミサを捧げました。どなたかが、聖堂の後ろにいても、よく聞こえていましたよとおっしゃっていました。

ミサの意向は、まずは清瀬教会の方のため、新型コロナウイルスと戦っている方々と、その家族の方々への励まし、感染を恐れて気持ちが休まらない方々、それに、亡くなられた方々への追悼です。その中には亡くなった司祭たちも入っています。今の香部屋ミサは、感染状態が沈静化し、公的ミサ開始が宣言されるまで続くでしょう。私の場合、ミサの前後に、ロザリオが入ります。聖母の底知れない慈しみが、お一人お一人に届けられると単純に信じているからです。

## 投稿

ピーちゃんの思い出  
三地区 仲丸恭子

ずっと昔、三〇年も前のことです。わが家に、ピーちゃんという雀がやって来ました。通勤途中、巣から地面に落ちていたのを見つけたのです。そーつと手のひらに乗せて、職場に連れて行きました。運の良いことに、その日、私の職場で獣医さんの会合が開かれていました。専門は牛や豚、鶏でしたが、優しい親切な獣医さんがすぐに対応してくださいました。そして、帰りに買って帰るものと、帰ったら書くことを書いて、割りばしの先を細く削った雀用のスプーンも作ってくださいだったのでした。「連れて帰って焼き鳥にするの？」と言ういじわるな獣医さんもいました・・・。

お菓子の箱にティッシュペーパーを敷いたベッドにピーちゃんを寝かせ、ドキドキしながら仕事をして定時を迎えました。そして、デパートに寄って、雛用の餌など必要なものを調達して、西武線に乗せてピーちゃんを連れて帰りました。

生き物が好きで何でも拾ってくるしような子供だった娘が、いい年になって雀の雛を拾ってきてしまったわけですが、子どもが子どもなら親も親、すっかり雀に夢中になってしまいました。娘の小学校時代、家で何度も小鳥の雛を孵した経験から、父がピーちゃんの口にご飯を運ぶ時の、獣医さん特製スプーンの角度は、雀のお母さんに負けない絶妙さでした。瀕死の状態だったピーちゃんは、どんどん元気になっていきました。かわいそうだったのは、六歳だった少し太めの柴犬の女

の子です。突然、お姫様の座を奪われてしまったのですから。ピーちゃんが女の子だったかどうか定かではありませんが・・・お父さんもお母さんもおねえさん(三〇年前)も、どうしてチロじやなくてピーちゃんなの？と思ったのでしょうか。気がつくと思しうに、食べられないように少し高いところに置いてある籠を見上げて立っていたものでした。

なかなか羽毛が生え揃わなくていつまでも鶏肉色のおしりをしていたピーちゃんでしたが、ご飯をいっぱい食べて大きくなってりっぱな雀になりました。そして、別れの日が近づいてきました。「このまま手乗り雀になってしまおうと自然に帰れなくなる」という父の一言で、母も私もピーちゃんを放す決心をしたのでした。別れの日、初めて網戸を開けて、私の手に乗せたピー

ちゃんを縁側に出しました。しばらく手に乗ったまま動きませんが、羽ばたいて庭の植木に止まり、空へ飛んでいきました。

時々、ピーちゃんによく似た雀が庭にやって来ました。懐かしくて帰って来てくれたのでしょうか。お母さんやきょうだいと離れ、一人で都会から東京のはずれの清瀬にやって来てさびしかったかもしれませんが、今、教会にたくさんの雀が来ているのが、空の上から見えるでしょうか。いっしょに遊べたら良かったのにとおもいます。



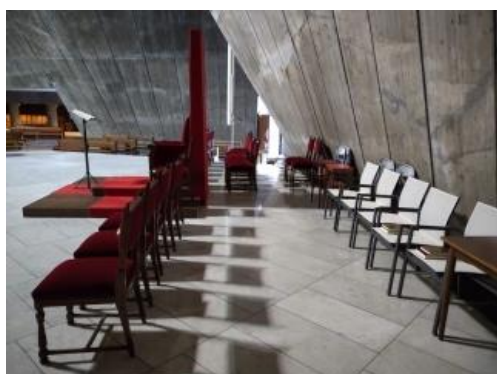
菊地大司教様の  
お説教について

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、公開のミサがでない状態が続いていますが、四旬節第一主日（三月一日）から、これまで、菊地大司教様はカテドラルにて、非公開で主日のミサを捧げ、この動画をインターネットにて配信しております。

しかしこの動画を視聴できない信者の方が大勢いることを考慮し、ミサ中の説教のいくつかを以下に掲載いたします。

この非公開ミサには、聖歌や朗読をお願いしている師イエズス修道会やイエスのカリタス会他のシスターが間隔を空け参加しています。

以下の写真は、動画配信のための機器や、聖堂内の様子です。





2020年3月1日  
四旬節第一主日  
菊地功大司教 ミサ説教

今年の四旬節は、これまで経験したことがない四旬節となってしまいました。新型コロナウイルスの感染拡大をなるべく緩やかなものとするために、この二週間ほどが最も重要な期間であるという専門家会議の見解を受けて、主日のミサをその期間に限って非公開とすることを決めました。

ミサの中止という言葉が一人歩きしていますが、教区共同体という視点から見れば、ミサは続けられています。中止とされているのは公開のミサですが、司祭は主日の務めとして今日もミサを捧げており、そのミサは、たとえ「信者が列席できなくても、感謝の祭儀はキリストの行為であり、教会の行為」として、共同体の公のミサであります。

とはいえ、感謝の祭儀は「キリスト教的な生活全体の源泉であり頂点で」ありますし、「聖体の集会においてキリストの体によって養われた者は、この最も神聖な神秘が適切に示し、見事に実現する神の民の一致を具体的に表す」と、第二バチカン公会議の教会憲章に記されていますから、ミサにあずかることと、聖体を拝領することは、わたしたちの信仰生活にとって欠くべからざる重要なことでもあります。

その意味で、現在のような状況は、あってはならないことでもあります。未知のウイルスからの感染を避けるために、わたしたちはしばらくの間、集まることを止めているのですが、それは決して共同体を解散したという意味ではありません。やむを得ない状況の中で集まり得ないときにも、共同体は存続し、ともに主の日に祈りを捧げる義務は消失していません。

また教会の伝統は、聖体拝領を通じてキリストとの内的な一致を目指すために、秘跡を通じた拝領と、霊的な拝領の二つがあることも教えています。

こうやって映像を通じてともに祈りを捧げるとき、またそれぞれの家庭で祈りを捧げるとき、それはひとり個人の信心業ではなく、キリスト者の共同体のきずなのうちにある祈りであり、その祈りのうちにあって、ぜひキリストとの一致を求めて、霊的に聖体を拝領していただければと思います。

この不幸な状況は、同時に、わたしたちに様々な信仰における挑戦を突きつけておられます。ちょうど主イエスが、その公生活を始めるにあたり40日の試練を受けら

れたように、わたしたちもいま、復活の喜びに向けて心を整える40日間にあって、大きな試練に直面しております。

先ほど朗読された福音によれば、40日の試練の中で、イエスは三つの大きな誘惑を受けておられます。

まず空腹を覚えた時に、石をパンにせよとの誘惑。次にすべての権力と繁栄を手にすることへの誘惑。そして神への挑戦の誘惑。この三つの誘惑が記されています。

第一に、人間の本能的な欲望や安楽にとどまることへの願望。第二に、権力や繁栄という利己的な欲望。第三に、人間こそこの世の支配者であるという思い上がり。

悪魔からの誘惑とは一体どういうことか。それは、神から離れる方向へと人をいざなう、さまざまな負の力のことでしょう。そういう誘惑はどこからか降りかかってくるのかといえば、実は、外からやってくるものではない。その多くは、結局のところ、わたしたち一人ひとりの心の中から生み出されている。わたしたちの心の反映であるように思います。

わたしたちがいま直面している試練はどうでしょう。

東京ドームでミサを捧げられた教皇フランシスコは、「わたしたちは、すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています」と述べて、わたしたちが視点を、自分から他者へ移すようにと、むなしく輝く虚飾のシャボン玉を打ち破って外へ出向くようにと呼びかけられました。

その上で教皇は、そのために必要なことは、「知恵と勇気をもって、無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに特徴づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度です」と指摘されました。

得体の知れないウイルスによる感染症が蔓延しつつある現在、感染の事実や発症の実態が目に見えない度合いがとて強い今回のコロナウイルスの感染拡大ですが、そのためにどうしてもわたしたちは疑心暗鬼の暗闇の中に閉じ込められたような気分になってしまいます。

確かに慎重な感染対策を行って、一人ひとりの身を守る行動は不可欠ですし、実際教会はいまそうしているわけですが、それが同時にわたしたち一人ひとりの心の内にも防御の「壁」を築き上げる結果になっていないでしょうか。

心が守りの姿勢になるとき、どうしてもその防御の「壁」はより堅固なものになり、自分を中心にした心の動きに、とらわれてしまいがちになります。それこそ悪魔の誘惑であります。

教皇は、「知恵と勇気をもって」行動せよと呼びかけます。

教皇は、「無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢」をもって、いのちを守る姿勢を証しせよと呼びかけます。

教皇は、「実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度」が必要だと呼びかけます。

2009年に新型インフルエンザが蔓延したとき、日本の司教団の部落差別人権委員会はメッセージを発表して、次のように指摘していました。

「「感染源」という発想から感染者探しにエネルギーを注ぐと、たくさんの「容疑者」を作り出していく危険があります。・・・感染症対策という名で社会防衛策がとられると、菌やウィルスよりも人々の間に不安や恐怖が伝播して偏見や差別を社会の中で醸成していく危険があります」

これもわたしたちが悪魔の誘惑に屈して築き上げてしまう心の防御の「壁」のなせる業であります。

わたしたちは体の健康を守るための防御壁を必要としていますが、その壁が、心の中にまで防御の「壁」を築き上げないように心したいと思います。

「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、パンの必要性を否定をしてはいません。しかしイエスは、それよりも重要なものがあるのだとして、「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と述べられています。

人は、自分のいのちを守るためにパンを必要とするが、それ以上に、神の言葉、すなわちすべてのいのちを守るための神の一人ひとりへの思いが実現することこそ、人を生かすのだ。

他者への思いやりの心は、単なる人間としての優しさに基づいているのではなく、神の言葉を実現させたいという信仰における確信に基づいています。その確信は、神ご自身が大切に思われているすべてのいのちに対する思いやりの心、豊かな想像力を持った配慮を、わたしたちに求めています。

この困難な時期、教会共同体においてつながっている兄弟姉妹に思いを馳せ、そのつながりの中でわたしたちは一致へと招かれていることをあらためて思い起こしましょう。そして体の防御の壁が心の「壁」になってしまわないように、神が愛されるすべてのいのちへと、わたしたちの心の思いを馳せましょう。

2020年4月5日

受難の主日

菊地功大司教 ミサ説教

教会の扉が閉じられたままで、聖週間がはじまりました。感染症が拡大する中で、先行きの見えない不安に苛まれながら、わたしたちは、先ほどの受難の朗読にあつたとおり、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と声をあげてしまいたくなります。

大勢の群衆の歓声の中、エルサレムに迎え入れられたイエスは、同じ群衆から「十字架に付けろ」とののしられ、死へ至る苦しみへと追いやられていきます。十字架上の苦しみの中で主イエスは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫び声を上げられました。裏切られ、見捨てられ、孤独の内に、人生のすべてを、そして究極的にはいのちでさえ奪われていく悲しさ。むなしさ。苦しみ。

しかしその悲しみ、むなしさ、苦しみがあったからこそ、「神はキリストを高く上げ、あらゆるものにまさる名をお与えになった」とパウロは指摘します。

「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」であった。だからこそすべての舌が「イエス・キリストは主である」と公に宣べるようになる。それも、苦しみ抜いた本人を褒め称えるためではなくて、父である神をたたえるためなのだと、使徒は書いています。

行動を共にしてきた弟子からも裏切られ、歓声を持って迎え入れた群衆からも見捨てられ、孤独の内にいのちの危機に直面されたイエスは、まさしくわたしたち多くが体験する苦しみのなかでも究極の苦しみを、自らご自分のものとされました。

わたしたちが生きている社会には、経済的な要因から、政治的な要因から、また地域の不安定な治安状況や紛争のために、さらには災害のために、いのちの危機に直面する人たちが多数存在してきました。国際的なレベルでも、国内的なレベルでも、いのちの危機に直面する人たちは常に存在します。その中には、どこからも助けの手が差し伸べられずに、孤独の内に苦しんでおられる方も少なからずいることを、わたしたちはニュースなどで耳にしてきました。



「出向いていく教会であれ」と言うメッセージと、「教会は野戦病院であれ」と言うメッセージは、教皇フランシスコが、教会のあるべき姿として、たびたび繰り返してこられたメッセージです。

ベネディクト十六世が回勅「神は愛」の中で指摘されたように、教会の本質は、「神の言葉を告げ知らせること（宣教とあかし）、秘跡を祝うこと（典礼）、そして愛の奉仕を行うこと（ディアコニア）」であります。ですから長年にわたって教会は、社会にあって「愛の奉仕」を具体化しようと、様々な活動に取り組んできました。

それは第二バチカン公会議にあっても、例えば現代世界憲章の冒頭に、「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、特に貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある」と記すことで、教会が何を大切に歴史の中で歩みを進めるべきかを明確にしてきました。

東京ドームのミサで教皇フランシスコは、わたしたちに次のように呼びかけられました。

「いのちの福音を告げるということは、共同体としてわたしたちを駆り立て、わたしたちに強く求めます。それは、傷のいやしと、和解とゆるしの道を、つねに差し出す準備のある、野戦病院となることです」

でも考えてみると、これらの言葉はすべてわたしたちに、与えるものになりなさい、手を差し伸べるものになりなさいと呼びかける言葉です。もちろんそれは良いことでもあります。

しかし、2020年の初めからいまに至るまで、わたしたちが体験していることは何か。それは、わたしたち一人ひとりが、この目に見えないウイルスとの戦いの中で、いつでもいのちの危機に瀕する可能性を持っている弱いものであることを自覚させる体験であります。

どれほどわたしたち一人ひとりが、弱い存在であるかを自覚させる体験であります。誰かに助けをもらいたい、手を差し伸べてもらいたいと懇願する体験であります。大げさに言えばわたしたち人類はいま、すべての人が助けを必要としながら、孤独の中に取り残されて、いのちの危機に直面しています。

いまわたしたちは、取り残さないでくれと懇願しています。

人生からすべてを奪い取らないでくれと懇願しています。

暗闇の中に見捨てないでくれと懇願しています。

教皇フランシスコは3月27日の夕方に、今回の事態の終息を祈りながら、聖体降福式をもってローマと世界に向けた教皇祝福「ウルビ・エト・オルビ」を与えられました。

その中で、マルコ福音書に記された嵐を鎮めるイエスの物語を引用されて、こう述べています。

「わたしたちは恐れおののき、途方に暮れています。福音の中の弟子たちのように、思いもよらない激しい突風に不意を突かれたのです。わたしたちは自分たちが同じ船に乗っていることに気づきました。」 その上で、そのように気がついたわたしたちはいま、『わたしたちが溺れ死んで』しまうと不安げに一斉に叫んだあの弟子たちのように、わたしたちも、一人で勝手に進むことはできず、皆が一つになってはじめて前進できることを知ったのです」と指摘されています。

すなわち、わたしたちはこの嵐の中で、ひとり孤独の内に取り残されているのではなくて、同じ船に乗っている仲間がそこには存在していることに気がつかさせられている。いまずべきことは、ひとりで道を切り開こうとすることではなくて、船に乗っている仲間たちの存在に心をとめ、一緒になって前進しようと連帯することです。

教皇フランシスコが3月28日のお告げの祈りで、「あらゆる形の武力的対立を止め、人道支援回廊の構築を促し、外交に開き、最も弱い立場にある人々に配慮するよう」に世界のリーダーに求められたのは、まさしくいま人類は歴史の新しいステージに立っていることを自覚せよと呼びかけるためであります。

いまわたしたちは歴史の転換点に立っています。この感染症の危機が過ぎ去った後の世界は、これまでとは異なる世界になると主張する声も聞かれます。これまでの常識が通用しない世界なのかも知れません。どのような世界が感染症の後に展開するのか。その行方は、いま危機の中にあるわたしたちがどのような言動をするのかにかかっています。その世界を神の善が支配する世界とするためには、いま、連帯の道を選び、互いに助け合いながら、嵐に翻弄される船に乗り合わせた仲間として、一つになって前進することが大切です。

十字架の苦しみの先に復活の栄光があったのは、イエスがすべてを無にして、神にすべてをゆだねたからでした。困難の中にあるいま神の計らいにすべてをゆだね、兄弟姉妹と一致しながら歩む道を選択しなくてはなりません。対立や排除ではなく、神がその愛を持って包み込まれるすべての人と、心を繋いで立ち上がる。

神からの賜物である命を守るために、互いに連帯し、理解を深め、助け合い、支えあって行く道を求めましょう。

2020年4月12日

復活の主日

菊地功大司教 ミサ説教

皆様、主イエスの御復活おめでとうございます。

今この瞬間にも、世界中で、そして日本でも、多くの人がいのちを守ろうとして、いのちを救おうとして、力を尽くしておられます。感染が拡大し続け、いったいいつまでこのような状態が続くのだろうかと、先行きを見通すことが難しい中で、なんとかいのちの危機を食い止めようと努力する人たちの存在は、希望の光です。医療従事者に感謝し、その健康のために祈ります。

いのちを守るための闘いが続いている直中で、わたしたちは、新しいいのちへの復活という、わたしたちの信仰にとって、最も大切な出来事を記念し、祝っております。いのちを守る行動が、これほどまでに注目され、その価値が強調された四旬節と復活祭を、経験したことはありません。

多くの人が、とりわけわたし自身を含めた医学の素人が、今年の初め頃には、事態がこんなに大事になるとは思っていませんでした。世界中で段々と深刻さの度合いが増すに連れて、危機感を強めてこられた方も多いと思います。わたし自身も、一月半ば頃から今に至る三ヶ月間、東京教区をあくまで立場にあってどういう判断をするべきなのか、悩みました。医療の専門家にも何度も相談をしました。的確で時宜を得たアドバイスをいくつもいただきましたが、同時に専門家の間でも、事態のとらえ方が異なり、様々な意見があり、難しい選択を迫られて困惑することもありました。

まだ終息に至っていない現時点で、その決断の可否を判断し評価することはできませんが、教区全体で公開のミサを中止にするという判断は、簡単に到達した結論ではありません。その判断が、一〇万を超える東京教区の信徒の方に及ぼす影響を考えたとき、いのちを守るためにとるべき最善の道はどこにあるのか、逡巡を重ねてきましたし、今でも毎日、刻々と変化する状況を目の当たりにして、次の決断へと悩む日々が続いています。

しかし常に念頭に置いているのは、神からあたえられた賜物であるいのちを守るために最善の道を探ることであり、同時に、信仰のうちに神への信頼を失わない道を探求することでもあります。

人類は今、いのちの危機に直面していると言っても過言ではありません。人類全体に影響を及ぼすいのちの危機は、凄まじい強力な伝染病や、星の衝突や、巨大地震や火山の噴火といった天災ではなく、たいしたことの無い風邪のようだと当初は言われた、ウイルスによってもたらされました。大混乱をもたらす災害によっていのちの危機が明白に生じるのではなくて、知らないうちに感染しそれが知らないうちに拡大し、いまは危機的状況なのだとは何度も自分に言い聞かせなければ忘れてしまいそうな弱々しい形で、わたしたちに迫ってきました。

これまでの歴史の中でわたしたちが築き上げてきた世界が、大げさな言い方かも知れませんが、これほど簡単にいわば存亡の危機に直面するとは、思ってもみませんでした。

今般の感染症の拡大という理不尽な出来事は、混乱と恐れと悲しみをわたしたちにもたらしていますが、同時に、少し立ち止まって、今までの世界の歩みを見つめ直し、新しい世界へと変わっていく道を探るよう、わたしたちを促しているようにも思います。

教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シ」にあるように、わたしたちはいのちを守るために、総合的なエコロジーの観点から、地球環境問題をはじめとした人間のいのちを取り巻く様々な課題に取り組むことが必須であると議論を続けていました。

わたしたちの共通の家をまもり、将来の世代によりふさわしい環境を残していく責任を果たすためには、「この世界でわたしたちは何のために生きるのか、わたしたちはなぜここにいるのか、わたしたちの働きとあらゆる取り組みの目標はいかなるものか、わたしたちは地球から何を望まれているのか」といった問いに答えていかなければならないと、教皇は回勅で呼びかけます（160）。

わたしたちは、現時点では、感染症の前にまさしくなすすべもなく、途方に暮れていのちの危機に直面しています。加えて、この事態が、人類の歴史の中で、今回が最後であると、いったい誰が断言できるのでしょうか。わたしたちは、自らの存在の意味を、あらためて問い直すように、招かれています。

コリントの教会への手紙に、「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい」という言葉が記されていました。

復活された主の新しいいのちへと招かれている教会には、常に新しいいのちを生きるために、その立ち位置を過去に固定させ留まることなく、前進し続けることが求

められています。

実際、今般の出来事によって、聖堂に共に集い、聖体祭儀にあずかって、キリストの体における一致を体験することができなくなっている教会は、半ば強制的に、そのあり方を変革するように求められています。

聖体祭儀がその中心であることには何も変わりがないものの、それができなくなっている今、世界中の教会は、共同体のきずなを確認し深めるために、様々な手段を講じています。このようにインターネットを通じてミサを中継している教会も多くありますし、講座や祈りを、配信し始めたところも少なくありません。日本だけではなく、世界中です。司祭や信徒が個人で発信を始めている例も少なくありません。

心の避難所である教会の存在は、どの時代にも重要です。祈りを捧げる聖なる場所も信仰には必要です。共同体の皆と共に、一緒に賛美を捧げる場所は、わたしたちにとって欠かすことができません。わたしたちの信仰は、共同体の信仰です。ですから教会に集まると言うことが、消滅してしまうわけではありません。

しかし、今回の事態はわたしたちに、目に見えない教会共同体のきずなを深めることの大切さ、そして目に見えない教会共同体のきずなは、毎日の家庭や社会での生活にあってもつながっていることを、あらためて自覚させてくれました。すなわち、わたしたちの信仰は、日曜日に教会に集まってきたときにだけ息を吹き返すパートタイムの信仰ではなくて、教皇フランシスコがしばしば指摘されるように、フルタイムの信仰であることを、思い起こさせてくれています。

インターネットで様々な場所からのミサの中継があることで、選択肢が増えたと喜んでおられる方もいるのかも知れません。

違うのです。

インターネットを通じて、教会が皆さんの毎日の生活の中にやってきたのです。教会は生活とかけ離れた存在ではなくて、毎日の生活の中にあるものとなったのです。教会は特別なところではなくて、普段の生活の一部となろうとしています。

教会は、社会から隔離された避難所ではなく、社会の荒波の直中にある一艘の船です。港に繋がれている船ではなくて、荒波に乗りだしている船です。

同じ船に乗っている仲間として、そのきずなをあらためて確認し、いのちの危機に直面している世界の直中で、復活された主イエスの新しいいのちへの希望を、光り輝かせる新しい教会となりましょう。

2020年5月10日  
復活節第五主日  
菊地功大司教 ミサ説教

最後に皆さんと一緒にこの大聖堂でミサを捧げたのは、2月26日、灰の水曜日のことでした。その翌日から、ともに集い、ともに賛美を捧げ、ともに祈ることを、一時中断しています。緊急事態が宣言されている間は、公開ミサの中止を継続せざるを得ません。感染しないためであり、感染させないためでもあります。

今年の復活祭に洗礼を受けるため、準備してこられた多くのみなさん。わたしたちは、信仰共同体の心のきずなで結ばれていることを、どうか心にとめてください。再び集まれる日に、喜びと希望をもって一緒に賛美を捧げることができるよう、この困難な時期の間も、わたしと、そして教区のみなさんと、祈りの時をともにしてください。

また、病床にあって不安のうちに毎日を過ごしておられる方々、苦しみの中で闘っておられる方々、経済的な困難に直面しておられる方々。いのちの与え主である神が、皆さんを力づけ、守ってくださるよう祈っています。またいのちを救うために、日夜奮闘されている医療関係者の皆さん。心からの感謝とともに、皆さんの健康が守られるように祈っています。

教会は、歴史の中で、様々な変革を体験してきましたが、今また、変わることをせまられています。これまで培ってきた教会のあり方を、大きく変えなくてはならないのかも知れません。共同体として集まることの大切さには変わりがないものの、同時に、現在のような事態にあって、たとえ実際に集まらなくても、霊的な共同体を育てていく術を、見いだすように求められていると思います。

そもそもわたしたちの信仰は、共同体の信仰です。わたしたちの信仰は、「交わり」のうちにある信仰です。「交わり」とは、「共有する」ことだったり、「分かち合う」ことだったり、「あずかる」ことを意味しています。コリント書に、「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか(1コリ10:16)」とある、「あずかる」は、「交わり」のことです。わたしたちの信仰は、キリストの体である共同体の交わりのなかで、生きている信仰です。教会に集まれない今、わたしたちは祈りのときをともにしながら、主日には霊的聖体拝領が勧められていますが、その霊的聖体拝領は、個人の信心のためではなくて、共同体の「交わり」のためであります。キリストの御体にあずかること、すなわち交わりです。



ですから、離れていたとしても、わたしたちは一つのキリストの体の一部としてあり、その交わりの中で一致へと招かれているのだということを、忘れないようにいたしましょう。

主イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」と福音の中で語られます。

イエスは、地図にすでに描かれている道を案内してくれるガイドではなくて、自分こそが何もないところに新たに切り開かれていく道そのものであると宣言されます。すなわち、御父へと至る道は、すでに存在している道ではなくて、常にイエスご自身が先頭に立って切り開いて行かれる新しい道であり、イエスご自身のことであります。ですから、わたしたちは御父へと至る道を、一人で勝手に歩むことはできません。新しい道を知らないからです。イエスに付き従って、歩み続けなければなりません。そしてその道を、わたしたちは共同体の交わりのうちに歩みます。ともに分かち合い支え合いながら、共同体として道であるイエスに付き従います。

初代教会では、弟子の数が増え続け発展してきた頃に、その実際の運営を巡って対立と混乱が生じたと、使徒言行録に記されています。

そこで教会共同体にとって優先すべきことは何かを識別し、そのために新たな教会のあり方を定めていったのです。第一の変革です。神の言葉を告げしらせることこそ優先すべきことであると識別した教会は、そのための制度を整えたことで、さらに発展を遂げていきました。

今の時代にあっても、その優先事項は変わっていません。教会は、「神の言葉をないがしろにして」はなりません。神の言葉をさらに多くの人たちに告げていくために、この状況にあって教会はどのようなあり方がふさわしいのか、見直していかなくてはならないのです。もし新たな挑戦を何も始めなければ、集まることのできない教会は、御父へと至る道を切り開き進まれる主を、遙か彼方に眺めながら、取り残されていくだけです。いま教会は変革のときにあります。

特に、洗礼を受けた後に、様々な事情から、教会と距離を置いている多くの方々に、心から申し上げたい。教会は今、変わらなくてはなりません。そのためには、皆さん一人ひとりが必要です。

さて、そのような旅路を続ける中で、「神をあがめ、キリスト者を神の御旨と完全に一致した生活に向かうように導く」のは、聖母マリアへの信心であると述べたのは、パウロ六世でした（マリアーリス・クルトゥス 39）。

教会は伝統的に五月を聖母の月としていますが、今年の聖母の月にあたり教皇フランシスコはすべての信徒へ書簡を送り、次のように招いておられます。

「五月は、神の民がとりわけ熱心におとめマリアへの愛と崇敬を表す月です。五月には家庭で家族一緒にロザリオの祈りを唱える伝統があります。感染症の大流行によるさまざまな制約の結果、わたしたちはこの『家庭で祈る』という側面がなおさら大切であることを、霊的な観点からも知るようになりました」

教皇は二つの祈りを用意して、ロザリオを唱えるときに祈るようにと招いておられます。

今週、5月13日は、ファティマの聖母の祝日です。1917年5月13日から10月13日の間にポルトガルで、ルチア、ヤシнта、フランシスコの三人の子どもたちに、聖母は六回出現されました。

1917年5月13日に行われたヤシнтаとフランシスコの列聖式の説教で、教皇フランシスコはこう述べておられます。

「ルチアによれば、3人の子供たちは聖母から発せられた光に包まれたといます。聖母は神から与えられた光のマントで彼らを包まれたのです。聖母のマントの下にあるものは失われません。聖母の抱擁によって、必要な希望と平和がやってくるでしょう。親愛なる兄弟姉妹の皆さん、他の人が耳を傾けてくれるとの希望をもって神に祈りましょう。そして他の人に語りましょう、神は確かに私たちを助けて下さると。」

同じ確信を持って、困難な状況にあるわたしたちは、聖母の取り次ぎを求めて祈りましょう。聖母マリアが、わたしたちを「神の御旨と完全に一致した生活に向かうように」、道、真理、いのちである主イエスへと導いてくださるよう祈りましょう。また聖母の取り次ぎによって主へと導かれた教会が、自らのあり方について識別を深め、困難な時期にあつて、社会における希望の光となる道を見いだすことができるように、祈り続けましょう。



東京大司教 タルチシオ菊地功